ミュージアム通信

小川原脩記念美術館　☎21-4141
観覧料：一　般　500円（400円）
高校生　300円（200円）
小中学生　100円（50円）

倶知安風土館　☎22-6631
観覧料：一　般　200円（100円）
高校生以下、美術館観覧者無料

開館時間は9時～17時
入館は16時30分まで
※（　）内は10名以上の団体料金
11月の休館日 毎週火曜日、4日※3日は開館
美術館：16～20日（展示替え）
風土館：19～20日（展示替え）

展覧会のお知らせ

■第1展示室

小川原脩展「アジアへのまなざし」
会　期：開催中～11月15日(日)

第62回「麓彩会展」
1958年、小川原脩をはじめとする8人の発起人により創設された「麓彩会」。62回目を迎える本展では、北海道における美術の現況をもうかがい知ることのできる展覧会として、これまでの形をさらに発展拡大し、地域にゆかりが深い作家、今現在この地域に根差した創作活動を展開する作家の近作26点をご紹介します。小川原脩が麓彩会展を「地方文化の苗床」として位置付けたとおり、地域の美術を一望のもとに観覧していただく展覧会です。
会　期：11月21日(土)～令和3年2月7日(日)

■第2展示室

小川原脩展「世界へ向かう：シュルレアリスムと美術」
東京美術学校（現・東京藝大）卒業後、シュルレアリスム（超現実主義）の芸術運動に飛び込んでいった若き画家・小川原脩。本格的にシュルレアリスム絵画に身を投じた1937年頃から、戦争へと傾いていく時代まで、激動の時期に描かれた作品をクローズアップします。
会　期：開催中～令和3年1月11日(月)

アート・イベントのお知らせ

■土曜サロン※各回定員10名

世界のグレートアーティスト（5）「象徴主義　世紀末の画家たち」
日　時：11月7日(土)　①14時、②15時
会　場：映像ルーム（無料）　お話し：柴　勤（館長）

ギャラリー・トーク「麓彩会展の新たな歩み」
日　時：11月21日(土)　①14時、②15時
会　場：第1展示室（無料）　お話し：沼田絵美（学芸員）

ユネスコ世界遺産（4）「マヤ文化とインカ文明」
日　時：11月28日(土)　①14時、②15時
会　場：映像ルーム（無料）　お話し：柴　勤（館長）

■道新ミュージアム・コンサート

「秋空に響くチェロの音色～文屋治実チェロコンサート」
日　時：11月14日(土)14時～15時　会　場：当館ロビー（無料）　定　員：40名（予約制）
出　演：文屋治実（チェロ）・新堀聡子（ピアノ）
チェリストとしてかつては札響、現在はリサイタルを中心に幅広い活動を展開している文屋治実さん。ドイツで研さんを積んだ新堀聡子さん。二人の奏でる柔らかな音色を心行くまでお楽しみください。
予約受付：11月5日(木)9時から電話申込（☎21－4141）

★文化の日（11月3日(火)）は美術館・風土館観覧無料

美術館では絵画コンクール「ふるさとを描こう」の作品展示をしています。ぜひお越しください。

あれ、大きい！

という声を心待ちにしているのですが、どなたも気付いていない様子。実は今年度の初めから、キャプション（題名や制作年、作者名を記した作品用の小さなパネル）を思い切って長方形に変更したのです。離れても判読できるように、文字のサイズを大きくし、字体も簡素なものにしました。
作品の展示はもちろん、パネル類も見やすく分かりやすく、ということを心がけています。キャプションへの反応がないのは、違和感なく受け入れられている証拠と勝手に思い込んでいますが、さてさて、いかがなものでしょう。

館長　柴（しば）　勤（つとむ）

感動の場 一点

『断層A』
1937年　小川原　脩　画

すっぱりと分かれた大地の裂け目。小川原脩はこのイメージに「断層」と名付けました。同じく小川原の作品で、写真と構想段階での素描だけが残る「貴婦人達」には、同様の風景が登場します。その印象はマックス・エルンストの「風景の対蹠点」（1936年）に大変似通っており、連想のスタート地点であると考えられます。
このエルンストというシュルレアリスムの画家を積極的に日本に紹介した一人が、詩人で美術評論家の瀧口修造（1903-1979）です。瀧口と小川原は、東京府美術館での独立展の会場で出会い、新宿・武蔵野茶廊でのシュルレアリスムに関心を寄せる若者が集い語り合った場に同席していました。瀧口も小川原に好意的な関心を抱いていたようで、1937年の個展の際には「影響ということは、或る作家の修練時代にとって決して排すべきことではなく、この点で彼が狭隘（きょうあい）な独創性を誇示しないだけでも推賞すべきである。しかし私がこの作家に切に望むことは、彼が彼固有の対象を発見することである。」と美術雑誌に寄せ、小川原の今後の成長に期待していたことが読み取れます。シュルレアリスムに深く傾倒した20代の小川原は、国内外の多くの芸術家たちとの出会いに導かれ、想像の翼を羽ばたかせていたのです。
※展覧会「世界へ向かう：シュルレアリスムと美術」では関連資料も豊富に紹介しています。この機会にぜひご覧ください

文：沼田　絵美（小川原脩記念美術館　学芸員）

ふるさと探訪

―日本で一番古い安野式小型唐箕（やすのしきこがたとうみ）―

451回

収穫して脱穀を終えたばかりの穀物には、実の入っていない籾（もみ）やごみなどがたくさん混ざっています。江戸時代以前は、箕（み）やむしろに乾かした穀物をひろげて、揺すったり風を送ったりしてごみをとる、とても時間のかかるやり方をしていました。食べられる実を素早く簡単により分けたい…。そんな願いをかなえたのが江戸時代に中国（唐）から伝わった唐箕（とうみ）で、漏斗（ろうと）（①）から入れ落とした穀物に、風胴（ふうどう）（②）のハンドルを回して風を送ることで、軽いもの（ごみや空籾）と重いもの（穀物）を効率よく分けられる優れものでした。
昭和の初め、安野亀松（やすのかめまつ）（現：安野農機㈱　愛媛県今治市）によって通常の5分の3ほどのコンパクトな唐箕（安野式小型唐箕）が作られました。小さく運びやすいため、本州はもちろん、海を越えて北海道にも普及しました。現在、倶知安風土館にも安野式小型唐箕が1点収蔵されていますが、2017年、民具研究者によって、北海道に流通し始めた頃に作製された、現在確認されている安野式小型唐箕の中で最も古いものであることが判明しました。寄贈者は不明ですが、旭川の農機具屋で買われ、最終的に倶知安周辺で使われたようで、手動からエンジンを使った電動に改造されていることからも、長い間大切に使われていたことが伺えます。

唐箕の製造業者は農機具の機械化などが進みはじめた昭和30年頃から少しずつ減り、次第に唐箕も見られなくなっていきました。ですが、もしかすると、大切にされ続けてきた唐箕が、今もどこかで回っているかもしれません。

文：小田桐　亮（倶知安風土館　学芸員）